



どう だん つ つ じ

# 満天星

第2号

令和2年5月26日

キーワードは『自己有用感』

校長 氏橋 俊司

新型コロナウイルス感染症対策を施しながらの不規則な学校生活が続いています。けれども多くの子どもたちは、毎日元気に登校しており、大変うれしく思っています。そして、今年全校挙げて頑張っている「あいさつ日本一運動」の声も、日に日に明るいものになってきました。このたびの緊急事態の中で、あらためて「普段どおり」の素晴らしさや有り難さを痛感するのは、私だけではないと思います。子どもたちからも、「友達と会えてうれしい」「一緒に勉強できて楽しい」などの声が聞かれ、学校の存在意義を振り返る機会となりました。

さて本年、学校教育目標のサブテーマを【わくわく登校 生き生き学習 笑顔でつながる学校づくり】と決めスタートしました。なかでもつながるということを重視しています。学校生活では、友達との関係がうまくいっている子どもは、往々にして安定し、明るく元気です。しかし全国的に見ても、残念なことに子どもたち同士のつながりが弱くなっていると言われ、結果的にいじめや不登校などの問題と深く関わっていると指摘されています。また、共に学ぼうとする態度や学習意欲そのものにも悪影響が出てしまい、学力不振へと結びついています。

このような背景をふまえ、本校では子どもたちのつながりを強めるために、「自己有用感」に焦点をあてました。自己有用感とは、他人から認められて生まれてくる感情のことです。「あの人が頼りにされている」「自分のしたことが他の人から認められている」「他の人の役に立った」「喜んでもらえた」などの気持ちをもつことで、この“他の人からという視点”が子どもの自信となったり、自分を肯定的に見たりすることにつながります。

毎朝、児童玄関のところで5・6年の児童数名が、登校してくる友だちに「おはようございます!」と元気よく声かけをしています。また、別の子どもは、黙々と砂で汚れた玄関周りの掃除をしています。

「ごくろうさん。明るいあいさつで、私も他のみんなも元気が出ます。」

「ありがとう。おかげでみんなが気持ちよく使えるよ。」

子どもたちが認められ感をもちながら（自信をもって）育ってほしいと願い、言葉を投げかけている日々です。

今年度は、授業や学校行事など全教育活動の中で自己有用感を育てる取り組みを行っていきます。ぜひ、ご家庭でも、地域でも「よくやってくれたね。」「本当に助かるよ。ありがとう。」など、子どもたちが自分の存在を実感し、自己有用感の高まっていく言葉かけをお願いいたします。町の宝である子どもたちを、ともに連携して育てて行きましょう。



「朝のあいさつ運動」